

□ 次の文章をよく読んで、あとの各問に答えなさい。

散歩の途中などに、建築中の家を見るのは楽しいものです。注棟上げがすんだばかりで、棟にまだ新しい御幣が風にひらひらしているのも面白いし、もうあらかた建て終えて、扉のかけや、廊下のすみなどに、家らしい注陰影の見え始めているのもいい。自分が金を出した家ではなく、どうせ他人の家なのですから、無責任にそんなことを楽しんでいて、大工さんにあやしまれたりしてしまします。

その頃はまだ、真新しい木の香や、ペンキのおいしかりかしていい家も、人が住み始めるとたちまちその家独特のにおいをもつようになる。そのにおいは、家にしみついた家族のにおいとでも言えればいいのでしょうか。何のにおいとも名づけることの出来ない特別なにおいなのです。体臭や食べものにおいや、使っている石鹸や家具や飼っている動物のにおい——おそらくそのようないろいろのにおいが、まじりあってひとつになっていて、私はよその家を訪ねるたびに、^①その家独特のにおいに、なつかしさとも反撥ともつかない、奇妙ないら立ちをおぼえます。

建築中の家には、^②そんな肉感的なところはありませぬ。^③それはもつと清潔で、それ故にもつと抽象的^注です。柱と梁とが組み合わされて、骨格だけ出来上った家を見ていると、私はふとそれをひとつの彫刻作品であるかのように考えたりします。崖に穴を掘って生きてきた太古から、変わることはない人間の、生きることへの意志と知恵、そのけなげな工夫の表現を、木組みのはしほしにも見ることが出来るような気もするのです。

だがやがてそれは、壁をめぐらし、塀を立て、自分自身の中へ閉じこもり始める。そうすると家はだんだんに外部の人間に、よそよそしい表情を示し始め、入っちゃいけない、ここからは私の城ですと言わんばかりに、内と外とを区別し始めるのです。小さな家は小さな家なりに、つましく世間の荒波に抵抗しているし、大きな家はもつと注おおうように自分の力をシニチヨウしているようです。

アパートにはそのような家の表情はありません。外から眺める限りでは、それはむしろ大昔の穴居生活にも似ているように思える。ひとつの家族が、一軒の家の内部で、ひそかに保ち続ける神秘的な血のつながり、そんなものはもう感じられませぬ。人間と家との関係、それは単に機能的なものだけで保たれているのではないと、私は思うのですが。

自分の家をもちたいと思いついたのは、いつ頃からだったでしょうか、はつきり憶えていませんが、とにかくその思いは、私の生きることへの態度ときり離せぬものであったことはたしかです。家をもちたいというだけでなく、家をもたねばならぬ——という他はない、一種つきつめた気持が、私にはあったようです。言いかえれば、それは生活の□をおろしたいという要求に他ならず、自分が仕事をつづけゆく上で、私にはどうしても、そういう形が必要だったのです。

結婚し、自分の家をもち、子供を産む——この最もあたり前な、人生の基盤を、私もまた求め、求めるだけでなく、それをひとつの生の基本的なイメージにまで高めようとした。西部劇に出てくる開拓者の小屋、自分で木をきり、石を築いて造り、時にはとりでとなり、時には彼等の墓ともなるあのbツツな小屋、私はそこに、^④家というものの最も根源的なイメージを見ていました。

都会に住み、自分の手で建てられぬにしても、家というものが私たちに對してもっている注直截な意味、それを私は見失いたくなかったのです。家があり、そこに妻と子が待っている、そこそ常に男の帰ってゆく場所なのであり、そこにテレビがあるがなかるうが、電気冷蔵庫があるがなかるうが、変りはないのです。

ですから私は、近頃のムードリビングとでもいいたくないような、小市民的幸福へのさそいに満ちた建築誌を見ていると、時々これでもいいだろうかと考えざるを得ませぬ。そこにあるのは、余りにも物質的な、そしてせいぜい機能的な住宅観ばかりです。もちろん便利なものを使うにこしたことはありませんし、家そのものも、機能的になってゆくのは将来のcヒツゼン的な方向でありましょう。けれども、家がいくら便利になり、立派になっても、中に住む家族のイメージがなければ、それはうつつです。家と家族との関係は、機械と使用者の関係とは異っている筈です。^⑤新しい家をつくることは、新しい家族のイメージなしではなし得ぬことだと思ふのです。

このような私の考えを、私の家の設計者篠原一男氏に、私はぶつけ、篠原氏は篠原氏なりに、それに答えてくれました。こうして出来上った私の家は、設計者の表現を借りると、「平面上の自由性をもっている無性格な空間」をもち、それは、「われわれの伝統的なすまいのもっている一つの特徴でもある」のです。

具体的に言うと、「このすまいは構造的に独立している二つの空間から成立している。主屋は単純に二分されて、南の室、北の室という無性格な空間に一たん還した」つまり、移動出来る家具を使って、どちらを寢室としてもよく、^⑥またひとつひとつの室を更に分けて、子供室などをつくることも可能なようになっていきます。

家が建つてみると、その自由な空間を使いこなすことが、私たち夫婦の課題となり、それは私にいつも、一種のdキンチヨウを与えてくれました。私は自分で、自分の家のもつ空間を支配せざるを得ないので、^e翫けてはられないという訳です。そんな七面倒くさい理屈なんて真平だとおっしゃる方もおありでしょう。自分の家をもつことが出来るということ自体が、例外的な驚沢に属する今の日本では、とにかく最小限の雨露をしのげる空間さえあればというのが、正直なところだと思います。けれどたとえば、先日来国立西洋美術館で開かれている「ル・コルビュジエ展」などを見ると、家を建てるという仕事が、どんなに想像力と思想と愛とを必要とする仕事かということが、はつきり判つてくるのです。

一軒の家のたたずまいをみつめると、私には人間に対する不思議な愛着の気持がわいてきます。一軒の家の中の、一人一人の人間、父と母、長男坊に次男坊、娘たち、赤ん坊、おばあさん、おじいさん——を私は心に描き、その一軒の家の中に寄りそって生活している彼のむすびつきと、そして孤独を思います。そこから何かの結論が出てくる訳ではなく、私はただ、そうしてみつめているうちに、ますます深く人間の不思議さとらわれてゆくだけなのです。

(谷川俊太郎『ん』まであるく』の文による)

注 棟上げ：家を建てるときに、柱や梁など骨組みが出来て、棟木を上げること。 陰影：かげ
抽象的：個々のものから共通している性質を抜き出してとらえるさま 直截：まわりくどくないこと
おうように：ゆったりと振る舞うこと

問一 線 a ~ e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

a シュチヨウ b ソマツ c ヒツゼン d キンチヨウ e 念(けて)

問二 線①「その家独特のにおいに、奇妙ないら立ちを覚えます」とありますが、作者はよその家を訪ねるたびにどうしてそのように感じるのですか。「くから」に続くように本文中から三十文字以内で探し、その理由を示した部分の初めと終りの五文字づつを抜き出して答えなさい。(句読点は含まない)

問三 線②「そんな肉感的なところ」とは具体的にどこをいうのですか。「くところ」に続くように、本文中の言葉を使って答えなさい。

問四 線③「それはもつと清潔で、それ故にもつと抽象的です」とありますが、作者が建築中の家をこのようにとらえるのはどうしてですか。次のア~エの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、真新しい木の香やペンキのにおいがする骨格の木組みから、人間の生きることへの意志と知恵や工夫の表現を感じ取るから。
イ、真新しい木の香やペンキのにおいがする骨格の木組みから、物質的で機能的な仕組みの構造的な家の様子を感じ取るから。
ウ、真新しい木の香やペンキのにおいがする骨格の木組みから、人間の小市民的な幸福のすまいの特徴を感じ取るから。
エ、真新しい木の香やペンキのにおいがする骨格の木組みから、構造的に独立している空間の自由性を感じ取るから。

問五 に入る言葉として最も適切なものを次のア~エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 荷 イ 腰 ウ 根 エ 場

問六 線④「家というものの最も根源的なイメージ」とありますが、これは具体的にどのようなイメージのことですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問七 線⑤「新しい家をつくることは、新しい家族のイメージなしではなし得ぬことだ」とありますが、作者が家と家族の関係をこのように考えるのはなぜですか。本文中の言葉を使って三十文字以内で説明しなさい。(記号、句読点は一字と数える。)

問八 線⑥「また」と同じ使い方をしているものを、次のア~エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、奈良は古寺が多く、また豊かな自然にもめぐまれている。
イ、今日もまたいいお天気でしょう。
ウ、さようなら。夏になったらまた会おうね。
エ、老人はまたとほとほと歩き始めた。

【二】 次の文章をよく読んで、あとの各問に答えなさい。

前章では、われわれは地球システムの中で人間圏をつくって生きている存在であるということ述べました。では、人間圏とはどういう過程を経て誕生したものなのか。それは結局われわれ現生人類の生き方に関係しています。現生人類であるわれわれも、それ以前の人類と同様、最初は狩猟採集という生き方をしていました。それが①あるときから、農耕牧畜という生き方になりました。

「人間圏」とは何かを考える場合、この、農耕牧畜という生き方と、狩猟採集という生き方を、地球システムという視点から、どう違うのか比較すればいいわけです。

狩猟採集という生き方は、生物圏のいわゆる食物連鎖に連なって生きる生き方です。これは人類に限りません。動物はみなそういう生き方をしています。草食動物は草を食むことですから、採集のようなものです。肉食動物はその草食動物を食べるという形で、いわゆる狩猟をしているのです。

ですから狩猟採集というのは、われわれもかつてはそれをやっていただけで、われわれ特有の生き方ではありません。動物はみんなそういう生き方をしている、という生き方です。

われわれ以外の動物は、地球の構成要素でいえば今も、生物圏の中に位置づけられています。われわれも狩猟採集をやっている段階では、生物圏の中の種の一つとして生きていたということになります。

では、農耕牧畜とはどういうことか。たとえば農耕を考えてみましょう。森林を伐採して畑に変えます。森林という状態の時と畑という状態の時とで、地球上でのモノやエネルギーの流れがどう異なるのかを比較してみれば、これらの生き方がどういうことなのか、地球システム論的に議論できるはずで。

農耕を始めた結果、太陽エネルギーの流れはどう変化するか。いちばん端的なのはアルベドの変化です。アルベドというのは、太陽の光のどれくらいが地表で吸収され、どれくらいが反射されるかという、わかりやすくいえば地表の反射率です。アルベドが森林と畑ではどうなのか。同じなら問題ありませんが、これが違えば、太陽エネルギーの流れが変化することです。じつは森林と畑とはアルベドが違います。ということは、太陽エネルギーの流れを変えているということになります。

あるいは物質の循環を比較してみても違いがみられます。雨が降ると、その雨が大地を侵食し、侵食された物質は海に流れ込みます。森林が覆っているときには、その下の土壌はほとんど侵食されません。しかしそれが畑に変化すると、その土壌は雨によって洗い流されてしまいます。侵食の割合がぜんぜん違うのです。侵食の割合が違うということは、モノの流れが影響を受けているということの意味します。ですから農耕を始めるということは、その結果、地球のモノやエネルギーの流れを変えてしまうということを意味します。そうすると、もはや生物圏の中に閉じて存在しているわけではないということになります。

ということは、それは人間圏という、別の構成要素をつくって生きている、と考えることができます。その人間圏を、いまの地球では夜半球に光の海として a シギベツでできるわけです。

つまりわれわれは、農耕牧畜という生き方を始めたときに、地球の上に新しい構成要素をつくって生きたのであり、これが人間圏なのです。そしてこのような構成要素をつくって生きていることが、文明という生き方ではないかと考えられるのです。

したがって文明とは何かといえは、宇宙的視点からは、人間圏をつくって生きている生き方、と定義することができます。

ここでも一度考えてみてください。現生人類とほかの人類とは、地球システム論的に考えたら同じ存在なのでしょう。違いますか。現生人類以外の人類はみな、生物圏の中に閉じた生き方、すなわちその中の②生物種の一種として生きてきました。現生人類は一万年くらい前から、その状態から脱して人間圏をつくって生きた。つまり「われわれとは何ぞや」という問いは、「人間圏をつくって生きるわれわれとは何ぞや」という問いに置きかえられるのです。

結局、単に「ヒトとは何ぞや」と問うことは「生物圏の中で狩猟採集をやっていたわれわれとは何ぞや」と問うことであり、いまのわれわれを問うていくことにならないのです。

ですから「人間とは何か」という問いが、そもそも問題としてはつきりと提示されていなかったといえます。文明の問題や、環境の問題や、いまのわれわれとは何ぞやという問題を考えるときに、どう考えるのか。何が問題なのか。そういう問題の b セイリができていなかったということなんです。

このように考えていけば、「文明とは何か」という問いは、じつは「人間圏とは何か」という問いになります。「われわれとは何か」という問いは「人間圏をつくって生きるわれわれとは何か」という問いになります。

そして環境問題というのは、「③地球システムの中で、人間圏というのは安定的な構成要素なのかどうか」を問う問題になってくるわけです。

人間圏は、人類が農耕牧畜をはじめたことによって誕生しました。

じつは、人間圏もまたシステムなのです。地球もシステムで、そのサブシステムが人間圏ですが、人間圏自体もまたシステムになっているのです。

そうすると、人間圏とは何なのかと考えるときにも、構成要素、関係性、^注駆動力の三つを考慮することがやはりポイントになります。

たとえば人間圏の構成要素とは、いまの人間圏でいえば「国家」です。

ただし全陸地を国境で区切ったような近代国家が誕生する以前の昔は、今のような^注グローバルな意味での人間圏は存在しませんでした。注ローカルな人間圏が世界各地にちらばっているような、個々に孤立した人間圏でした。それはいまでいう人間圏とは質が違うため、単純

に比較できるものではありません。

いちばん比較しやすいのは駆動力です。人間圏の内部に駆動力を持たない段階と、駆動力を持った段階。人間圏、つまり文明の歴史というの大きく分けると以下のような二段階に分かれます。私は前の段階の人間圏を、「④フロー依存型人間圏」、後者の駆動力を持った段階を「⑤ストック依存型人間圏」といって区別しています。

その境界は産業革命です。石油とか石炭を動力に利用し始めたときから、じつはわれわれは人間圏の中に駆動力を持ったのです。その結果、地球という星全体のモノやエネルギーの流れに、人類が直接かかわることができるようになったのです。

駆動力を持っていなかったころの人間圏というのは、単に、⑥地球システムによつて駆動されているモノとかエネルギーの流れを、人間圏にバイパスさせていただけです。

わかりやすいので日本で比較すると、駆動力を持たない段階というのは、江戸時代を考えてみればよいと思います。江戸時代には注鎖国もしていましたが、日本をそのまま人間圏だと考えてもいいでしょう。地球の上に閉じて人間圏があるのと同じように、日本列島の上にも日本という閉じた人間圏があったわけです。

江戸時代には何が駆動力だったかという点、太陽のエネルギーです。その結果、日本列島の上に降りそそぐ太陽光と雨のみを物質・エネルギー循環として利用しただけの、モノの生産でありエネルギーの利用だったのです。たとえば蠶からロウソクをつくり、何かを燃やせばその灰を再び利用して作物をつくる、というようなことです。

人間圏内部に駆動力を持たないこの段階では、当然食料の生産量というのには限られています。だから、人口はほぼ一定です。要するに食料の生産量で、養える人の数は決まってしまうわけです。日本列島に入ってくるエネルギーやモノの量で、そこで生産できる量も決まってくるから、当然それを利用する人の数も決まってくるから人口も、三〇〇万人くらいで一定だったのです。人間圏の規模というのは、この段階では一定です。増えもしないし減りもしない。もちろん、揺らぎはありますが、そういう安定したものでした。

このように、この段階は、地球という星によつて駆動されたモノやエネルギーの流れ（フロー）に依存した生き方ですから、私はこれを「フロー依存型人間圏」と名づけています。

ところが日本は明治以降、世界に門戸を開きました。世界はすでに産業革命以降の段階ですから、日本もAを持つ人間圏に組み込まれたということです。その結果、世界からモノが運ばれてくるようになりました。地球システム論的に考えれば、産業革命以後の人間圏が、日本では明治維新後の人間圏です。

明治時代以降は、日本列島の中でモノやエネルギーの流れが完結するわけではなくなりました。地球全体という規模になったので、利用できるエネルギーも物質も、たちどころに増えました。だから人口もその後、約四倍に増えたわけです。

それはまさに、二十世紀の人間圏に起こったこととまったく同じです。およそ一五億人だった世界の人口が六〇億人になったように、日本列島の人口も三〇〇万人くらいだったのが一億二〇〇〇万人になったわけです。

この段階は、駆動力として化石燃料やウラン鉱物など、地球システムのほかの構成要素に蓄積されたいろいろな物質（ストック）を取り出して利用します。したがってこれを「ストック依存型人間圏」と名づけています。

以上が私の考える大まかな人間圏の歴史です。これは今までの文明論では誰も語っていない、その本質を語るような文明論です。結局ストック依存型人間圏の段階では、われわれの欲望のままに、いくらでも地球上のモノやエネルギーの流れを変えられるということです。いま問われているのは、この欲望を解放して生きるといふ生き方の問題なのです。

それを別の言葉でいえば、「地球上のモノやエネルギーの流れを速めている」ということになります。われわれがなぜこれだけ豊かになったのかというと、じつは地球の上のモノの流れを速めたからです。つまり、ストック依存型人間圏誕生以降は、地球の時間を猛烈に速めてしまったといえるのです。

人間圏が生まれて一万年、かたや生物圏などは生まれて二〇億年です。単にこの時間を比較すると、生物圏に比べれば、人間圏なんて地球システムにとってはほんのわずかな影響力だと思われませんか。もちろん単純に、地球が太陽のまわりを何回まわったかという意味でいえば、人間圏の一万年も、地球上のほかの構成要素、生物圏だとか、大陸地殻などの物質圏の時間も、同じ一万年です。

I 今われわれが一年生きるために動かすモノやエネルギーの移動速度は、地球の営みとしてのモノやエネルギーの移動速度の、一〇万年ぶんに相当するのです。つまりわれわれは、時間を一〇万倍速めているということになります。

要するに人間圏が一万年であるならば、それを一〇万倍したものが、地球システムにおける物質循環に換算した、実質的な時間であるということになります。一万年の一〇万倍ということは、一〇億年です。

II 現在の人間圏は、もし生物圏の存続時間と比較するならば、もう一〇億年も存続しているくらいの、地球の上でのモノやエネルギーの流れを消費していることになるのです。

ですから、モノの循環を、ギジエンに考えるなら、地球システムにおける人間圏の存続時間はすでに一〇億年なのです。人間圏の地球へのインパクトを考える時、そういう時間への認識を持たなくては、考えを誤ります。

じつは、それが環境問題の根本の問題なのです。地球環境というのはその歴史を通じて常に変化しています。しかしわれわれがモノの循環を速めているために、人間圏が存在しなかった時に比べ、環境変化がずっと速くなっているということなのです。それを環境問題と呼んでいるだけなのです。

遺伝子操作の問題も同様に、時間を速めることが問題の本質なのです。生物の進化というのは遺伝子が変わることです。遺伝子操作はそれを人為的に起こすようなものです。問題なのは、変化の時間を短くするというのが、われわれの文明が直面する、より本質的な問題です。環境問題にしても、遺伝子操作の問題にしても、いずれも時間を短くするというのが、われわれの文明が直面する、より本質的な問題です。そのことをどう考えるかが、諸問題の解決策に直接からんできます。

（松井孝典『われわれはどこへ行くのか？』の文による）

注 システム：組織・仕組み。 循環：ひとまわりして、また元の場所・状態にかえり、それを繰り返すこと。
駆動：動力を与えて動かすこと。 グローバル：世界的な。地球規模の。 ローカル：地方特有の。地方的。
産業革命：産業の技術的改革によって、小さな手工業的な作業場が変わって、機械設備による大工場が成立したこと。
鎖国：江戸幕府が、中国・オランダ以外の国との貿易や行き来を禁じたこと。

問一 〓線 a～e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

a シキベツ b セイリ c 播(らぎ) d 猛烈 e キジュン

問二 Ⅰ・Ⅱ に入る言葉を次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、そして イ、つまり ウ、ところが エ、いずれも

問三 〓線①「ある」と同じ使われ方をしているものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、机の上にある本はどののですか。
イ、吹雪のため、ある町では三時間も停電が続いた。
ウ、直径一メートルもある大木が切りたおされた。
エ、体力に自信のある人はぜひ参加しなさい。

問四 〓線②「生物種の一種」とありますが、これと同じ意味のことを表現している部分を、これより前の本文中よりさがし、十字で抜き出さなさい。

問五 〓線③「地球システムの中で、人間圏というのは安定的な構成要素なのかどうか」とありますが、筆者はこれをどのようにとらえていますか。次のア～エの中から最も適切なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア、地球システムの中で、人間圏というのは安定した構成要素である。
イ、地球システムの中で、人間圏というのは安定した構成要素でない。

問六 〓線④「フロー依存型人間圏」とはどのようなことですか。説明している部分を、これより後の本文中よりさがし、その最初と最後の五字ずつを抜き出して答えなさい。

問七 〓線⑤「ストック依存型人間圏」とはどのようなことですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問八 〓線⑥「地球システムによって駆動されているモノとかエネルギーの流れを、人間圏にバイパスさせていた」とありますが、これはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適切なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア、自然のものや太陽光や雨などをエネルギー循環として利用して物や食料を生産するということ。
イ、駆動力として化石燃料やウラン鉱物などのいろいろな物質を取り出して物や食料を生産するということ。
ウ、日本列島の中だけで、地球システムに依存しないで、物や食料を生産するようになるということ。
エ、産業革命により機械化されたことによって世界規模で物や食料を生産するようになるということ。

問九 〓A に入る言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問十 本文の内容と一致するものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、現在の人間圏が、生物圏の時間と比較して、時間が速くなっているのは、モノの循環を速めた結果である。
イ、人間圏ができたころは、生物圏と人間圏はまったく別のものであったが、現在の人間圏は生物圏に近くなっている。
ウ、人間圏にも二つあるように、時間の速さにも二つあり、どちらの時間を選んだ方がよいかよく考える必要がある。
エ、人間が人間圏をつくって以来、人間圏はどんどん進化し続けているが、人口はそれにくらべて常に一定である。
オ、人間は、農耕牧畜をはじめたことによって太陽エネルギーの流れを変えてしまった結果、人間圏ができた。